

『名勇発功談』論：「江戸の水滸伝」のうち

著者	石川 秀巳
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	18
ページ	86(1)-65(22)
発行年	2010-12-22
URL	http://hdl.handle.net/10097/50931

『名勇発功談』論

——「江戸の水滸伝」のうち——

石川 秀巳

一 〈女の水滸伝〉の系譜

文政九年（一八二六）正月刊の十返舎一九作合巻『昔男癖物語』巻末に「本朝女水滸伝」の近刊予告がなされた。^①二年後の文政十一年（一八二八）正月刊、十返舎主人作・春斎英笑画の中本型読本『名勇発功談』五巻五冊はこの予告の実現と見てよいだろう。本書の序文に、南仙樵夫（為永春水）はこう記している。

爰に書林文永堂主人、永寿堂の主人と相識、翁に自家の意を述べて此小説を乞ふ。十返舎主人珍らしくも承引て、流俗の文にならひ、勇婦烈女の伝を挙、宋朝の梁山集儀を模写、頓に五巻の冊子なる。婦女水滸伝とも号べかりしを発功談と称しは、書賈の丁見によれり。^②

春水の見るところ、本書は「宋朝の梁山集儀を模写」「勇婦烈女の伝を挙」たものであり、作者のねらいもそこにあつたにちがいない。『水滸伝』に想を得て、舞台を日本に移し、女性の英雄集団の活躍を語る、次

のような物語群と共通の構想に成るものである。

- (1) 伊丹椿園『女水滸伝』（読本、四巻四冊、天明三年（一七八三）刊）
- (2) 好華堂野亭『新編女水滸伝』（読本、六巻六冊、文政元年（一八一八）刊）

- (3) 曲亭馬琴『傾城水滸伝』（合巻、十三編、百巻五十冊、文政八年（一八二五）／天保六年（一八三五）刊）

春水は書名を「婦女水滸伝」とするのが適当だったと言うが、冒頭に述べたとおり、本作には「本朝女水滸伝」の題名案があつた。また、後に取り上げる「十返舎主人元稿／九返舎主人補作」の第二編の内題は「名勇発功談 第二編 一名女水滸伝」^③であつて、これも「女水滸伝」の文字列を含む。だとしても、本書が椿園の『女水滸伝』に直接の影響を受けて書かれたわけではなさそうである。『水滸伝』好漢の役割を担う女侠の活躍を語るといふ基本構想において椿園作を参考にしたことは認めうるとしても、類似の趣向は見出しえないから、それ以上の影響はなかったと考へるべきだろう。

ただし、本作の基調を〈女の水滸伝〉の系譜につながる作品と見るとき、この作品が『水滸伝』の影響をどれだけ受けたかという問題は残る。侠女たちの形象から、それについて考えてみたい。

二 伊賀の局

本書は全五巻、通計十一回——第一巻のみ三回、他の巻は二回ずつ——の構成である。

第一回は次のように語り出される。

往時元弘建武の乱打続きて。皇統南北にわかれ。東西に矛楯やま
ず。這時足利贈左大臣尊氏卿。癰瘡の症発り。遂に延文三年四月。
薨去し給ひしより以来。尚も世の危き事は。深淵に臨て薄氷を踏
がごとく。天下今に反覆すべしと。諸人怪み思ふ所に……

この行文は『太平記』卷三十四「宰相中将殿賜_二將軍宣旨_一事」を写したものである。

鎌倉贈左大臣尊氏公、薨_レ給シ刻、世ノ危事、深淵ニ臨_レ薄氷ヲ
踏_ガ如ニシテ、天下今ニ反覆シヌト見ヘケル処ニ……

南北朝の時代、東国では「武家の兵権を握るべき。器用と見へ」た新田義興が竹沢右近の謀略によって討たれ、西国では南方の勇菊池武光も小式大伴のために勢力を失う。足利尊氏の死後、義詮が二代の將軍に、弟基氏が関東管領についたので、国内は静謐となった——こうした時代背景も、『太平記』の同じ章段の記事を切り継ぎして作り出されている。

る。

右のような状況を設定したうえで、一九は『太平記』に見えない義興室真弓の方・伊賀の局・閻魔の小芳・千束・花妙の尼らを次々に登場させて「勇婦烈女の伝を拵」、義興の遺児を戴いて秩父石龍山に拠った女侠たちが足利氏に抗する物語を展開させる。

最初に登場するのが、新田義貞の臣篠塚伊賀守の娘伊賀の局である。

(第一回 伊賀局膂力衆卒を打斃す／管領基氏公擒人を赦免す)

篠塚伊賀守の娘伊賀の局は吉野にあったが、新田家再興を期して東に下る。管領館を窺うところを怪しまれ捕縛される。基氏の尋問に対して、全てを白状し、せめて主の仇竹沢を討たせよと求めると、基氏は局の忠心を賞し、かわりに義興室真弓の方母子を解き放った。後難を恐れた竹沢は郎党に命じ追跡させた。

伊賀の局も史実に根拠を持つ人物である。四国にあって新田義貞の弟脇屋義助とともに戦っていた篠塚伊賀守は、義助病死の後、大館左馬之介が守る世田の城が落ちるとき、ただ一人敵船を奪い取って今張(今治)浦から隠岐の島に逃れた。第一回末尾は、『太平記』卷二十二「大館左馬之介討死ノ事附篠塚勇力之事」に載る篠塚の勇力譚を略述し、それを受けて次のように記す。

篠塚が祖父の剛氣を受継けるにや。其力量拔群なる事は。南朝
太平記にくわしく見へたり



図1 大蘇芳年
「月百姿 吉野山夜半月」

馬場信意『南朝太平記』（延宝六年（一八〇九）刊）⁵に取材したことを明かしている。同書巻第十八「南帝御没落吉野」附伊賀局勇力事」は、楠正行・正時兄弟が四条畷の戦いに戦死し、それまで吉野にあった後村上帝が楠正成三男正儀の進言に従い賀名生の奥に皇居を移すまでの顛末を語る。そこに載るのが伊賀の局の説話である。前半は、新待賢門院の女房として仕えていたが、高師直に追われ吉野宮から逃げる途中のできごとを伝える。吉野川の橋が落ちていて一行が難渋するとき、局が太木の枝を引き折って丸木橋を架けたので渡ることを得たというのである。後半は、吉野の宮に在ったとある夏の夜、局が庭に出て涼んでいるときに「さながら鬼の形にて、翼の生え出たるが、眼は月よりも光渡」る姿で藤原基遠の霊が現れたが、局は少しも臆することがなかったという話である。それら局の怪力・剛胆ぶりを表す説話を受けて、「後に左馬頭正儀の室となられけるとぞ聞えし」と結ばれる。

南朝廷臣らの逸話を集めた説話集『吉野拾遺』にも同じ話が載っている（むしろ、『南朝太平記』が『吉野拾遺』に基づいたと言うべきか）。明治に入つての浮世絵であるが、揚州周延の「東絵昼夜競」は二話を一枚に描き込むし、大蘇芳年「月百姿」連作のひとつ「吉野山夜半月」（図1）⁶は妖怪説話のほうを画題としている。一九は、勇力を持ち主として著名な伊賀の局を史実あるいは歴史説話から取り出してきて、中心人物に据えたわけである。

では、この物語の中ではそうした人物像がそのまま利用されたのだろうか。

こ、ににつたけしむくしん。篠塚伊賀守の処女。天然の美色なるうへ。
爰于新田家耳目の臣に。天然の美色なるうへ。
烈性にして。勇力衆に勝れ。刀剣の術にも伶俐かりければ。……

（第一回）

「烈性にして。勇力衆に勝れ」は先の説話から見出しうる。「刀剣の術にも伶俐かり」という能力も、それを延長したところに発想されよう。一九はさらに前述の典拠がとりわけて語ってはいない「天然の美色」までも付与して人物像を際立たせる。ちなみに、この烈性・美貌・武芸の三要素は、後に登場する女侠たちが共通して持つ美質でもある。

さて、伊賀の局はどのような行動を見せるのか。

さいつころ。吉野の皇居にめし出され。名を伊賀の局と賜り。君寵殊にめでたかりけるが。其後勅命によりて楠正儀の室となり。金剛山にありて。山中の徒然なるまゝに。越方の事どもおもひ詫つ。故主新田家の衰運を歎き。忽ち大志を起しておもふやうは。

父伊賀守は南海に趣き。弟八郎は北国にありて生死しれず。此上はわらは女なれども。父弟にかはり。東国に下りて一族の人々を尋ね素め。新田再興の事をくわだてん……（同前）

新田義興は矢口の渡で滅び、新田の嫡流が途絶えようとしている。伊賀の局は、新田家再興を期して夫楠正儀（正行・正時の弟）のもとを離れ関東に下った。女賊たちの正義の根拠として、新田再興の目的を設定するわけである。書肆の意向で決まったという書名「名勇発功談」の「功」はそこに関わった。

第一回の末尾、関東管領足利基氏は新田義興室真弓の方と拘禁中に誕生した女兒とを解放する。伊賀の局に護られて去った一行を、義興をだまし討ちにした竹沢右近は後難を恐れ郎等達に追跡させた。この記事を受けて語られる第二回後半を見よう。

（第二回）小芳真弓を匿て衛士を拒む／伊賀局仇敵の従士を斃す（後半）

竹沢の郎党に襲われた真弓の方は閻魔の小芳宅に匿われる。家捜ししようとする追手。その無礼に怒った小芳が父兵衛ともども対抗するとき、伊賀局もここに至り、撃退する。母子の素性を知った兵衛は、秩父石龍山に新田の余類が立て籠もっていることを教える。局らはその勧めに従い、石龍山に入った。

家に逃げ込んで来た真弓の方母子を、閻魔の小芳は押入に隠す。押し掛けた竹沢の郎党たちが家捜ししようとするのをとどめ、争いにな

るところに父山越兵衛も帰宅、やつと追いついた伊賀の局共々追い払う。その後、母子の身元を明かすと、兵衛は石龍山の一統を頼るよう助言する。

今武州秩父が嶽石龍山には。新田の余類連累を催し。首領を荒川太郎と号し遠近に跋扈し。強盗をなし。勢ひを震ふ……（第二回）

兵衛の勧めに従い、真弓の方と伊賀の局らは秩父が嶽に入る。吉野を離れるときの局の有望は、次のような形で具体化されるだろう。

元来勇猛希代の伊賀の局。はたして后に石龍山の魁首となり。数百の盜賊どもを配下となし。近国に横行し。守護頭人の私曲なるを討屠り。金銀貨物を掠とり。遠邦に馳ては。野伏落を劫し武具雑物を奪取。出生の姫君を男子と詐り。仮に小太郎吉益君と称して事変を伺ひ。再び義兵を起さんと。企けるこそ逞しき（同前）

石龍山はもともと新田の余類が結集した所であるが、首領荒川太郎以下「遠近に跋扈し。強盗をなし」ていた。あらたに入山した伊賀の局は、こういう経緯では語られないけれども、「数百の盜賊どもを配下となした。新田家再興のための義挙が同時に盜賊稼業に携わることでもあるというのが『水滸伝』の翻案たる所以である。

梁山泊好漢は、一面では盜賊集団でありつつ、「忠義双全」「替天行道」の旗印を掲げて宋朝に忠節を尽くそうと志す忠義の集団でもあった。春水が序文に「勇婦烈女の伝を挙、宋朝の梁山集儀を模写」ったと本書を要約したとき、梁山泊軍を「集儀（義）」と捉える立場に立っていたはずである。石龍山も同様の意味づけがなされ、義の拠点として確立し

たと言つてよいだろう。

ただし、石龍山入山後、伊賀の局が表だつて活躍したようではない。掠奪の対象が「私曲なる」「守護頭人」や「野伏落」であり、「私曲なるを討ち屠」るところに義賊的な意義があるはずなのに、一九はそこを具体的に語ることをしない。足利との直接対決も語られないところから、構想上の局の役割は、こうして「小太郎吉益君」を戴く新田再興の「義兵」の拠点を用意し、そこに女侠たちが結集してくるという物語枠を敷設するところにあつたと認めうる。この枠の中に閻魔の小芳・千束・花妙の尼らの女侠列伝をはめ込むのが、『水滸伝』に学んで案出された全体構成だつた。あるいは、横山邦治が指摘したような『女水滸伝』の物語構想の影響を受けたと見るべきかもしれない。横山はこう書いている。

各回女主人公を出現させるために筆を費して、それらの各回が全体を構成する部分をなし、それに、女主人公たちの配偶者が蜜国に捕えられ、やがて帰国して逮捕される、謀計による救助から生駒山の山寨にこもるといふ構想でしめくくる。⁽⁷⁾

浜田啓介の言う「水滸伝様式」の説明もこれに合致するだろう。

諸方に英雄たる者が個々に生じ、それぞれに伝とすることがあり、互いに交渉する機会を持ち、次第に一つの党に糾合せられるに至る。而して後に総力を以て、彼らの義とする処に従い一大挑戦をなすといふ構図⁽⁸⁾

『名勇発功談』の基本構想は右に指摘されたあり方に通するのである。

ところで、義賊的な行為を語らないこと、すなわち石龍山の在りようが明確でないことについての不審は、「勇婦烈女の伝」についても浮上するだろう。後に加わる女侠たちに義賊的意味づけが保持されるか、問題なしとしないからである。烈性・美貌・武芸の三美質を共通与えられながら、伊賀の局とは異質な形象を見せるのではないか。以下、各列伝について女侠像を検討していく。

三 閻魔の小芳

第二回後半で、竹沢郎党の追及から真弓の方母子を匿ったのが閻魔の小芳であつた。先行する第二回前半に、小芳の人物像が提示されている。

(第二回 小芳真弓を匿て衛士を拒む／伊賀局仇敵の従士を斃す〔前半〕)
山越兵衛時広は、建武の乱のおり新田方に属し手島河原の合戦に勇を顕わした人物だが、浪人し、鎌倉荒井坂に移り住んでいた。娘小芳は女の業を嫌って剣術・柔術を好み、荒井坂の閻魔に因んだ「閻魔の小芳」の仇名を持つ女伊達であつた。

山越兵衛は甲州台が原菅原刑部太郎時章の臣であり、手(豊)島河原の戦いに勲功があつたという。南朝あるいは新田に心を寄せる人物だつたのだろう。その心映えが次のように語られる。

山越兵衛時弘といふは、資性剛直にして、刀術は陰流の秘手を究め、雷名たかく。軍功被譽の士なりけるが、(中略) 倭者の為に。冤屈の難に遭浪人して今鎌倉にきたり。荒井坂のほとりに潜居し。復び仕宦の望を懷きて、年月を経るうち。妻は病死し…… (第二回) 「資性剛直」であり、ために倭人の讒言によって浪人した父親の性向を受け継いだのだから、娘小芳も、次のように紹介される。

一人の娘小芳といふもの。盛年二十歳にて稟性は桃顔の媚を含み、烈性にして幼雅の時より。針線の業を嫌ひ剣術柔術を事とし。父の奥旨を伝へければ…… (同前)

ここで、「桃顔の媚」(美貌)、「烈性」(勇侠)、「剣術柔術」(武芸)が、伊賀の局の造形と共通することを改めて確認しておこう。

ただし、「幼雅の時より。針線の業を嫌」ったことも関わって、小芳には父親とも伊賀の局とも異なる特徴が付与されている。それは「閨魔」の渾名の由来を語るところにあらわれる。

小よし成長にしたがひ。我侭短慮にして。動もすれば。壮士を相手に。喧嘩口論をなし。毎に短刀を腰に放さず。大磯化粧坂にあそびくらしけるゆへ。人拳女使士と称し。荒井坂焰魔王の顔色怕きにたぐへて。混名を焰广の小よしとぞいひならはしける。

(同前)

あるいは、父親没後の暮らし語りを語るところ。

独身となり。いよく心の俤に身持放蕩にして。近隣の若者どもを聚め。剣術の指南をなし。女狭と称せられて。溢物どもの首長

となり。世を我意にのみくらしけるが。…… (同前)

父兵衛が往年の気概を保持していたと想像されるのに対し、また、伊賀の局が武士的な容儀を崩さなかったのに比し、小芳は「我侭短慮」で、「喧嘩口論」を事とし、「女侠士」の名を得るほどだった。あるいは、「身持放蕩」で、「世を我意にのみくらし」といった性行を示す。「侠」の要素、「無頼」の資質が強調されているのである。これは『水滸伝』好漢の風を写し取ろうとした結果なのではあろうが、問題は、この延長線上に色情の要素が露わになってくることである。

(第三回 俠女の意恨劇場を噪す／小芳怕羞の情を発て三七に媚る)

父の老死後、小芳は我意にのみ過ごしていた。由比ヶ浜の芝居見物に行ったときのこと、大兵の侍にいたぶられる若者を救ってやる。その夜、礼のために尋ねてきた若者(具足師三七)を誘惑、三七も拒みきれず、二人は枕を並べる仲となった。一子三松も生まれる。

ある日、小芳は由比の浜に芝居見物にでかける。頭が邪魔で舞台が見えないなどと因縁をつけられ、若者が打擲されるのを見た小芳は、次のように反応する。

原より弱を救ふの性質なれば。己の身にあづからぬ事ながら。胸にすへかね棧敷をおり立。彼若ものを呼びだし。側に招きよせて。御身唯今あれなる侍に頭をうたれ。無念には思ひ給はずや(中略)



図2 巻二「小芳情を含んで三七を挑む」

御身おんみごとき柔弱じじやくの人を捉とらて。おとなげなき侍さむらいの行跡ふるまひ憎にくさにもくし。
わらは仕返しかへして参まらすべし。…… (第三回)

こうして「色黒く眼光いろくろ まなびかり。頬髭ほひげ草のごとくに生はたる大兵だいひやうの侍さむらい」に恐れもせず立ち向かうのは、「原より弱きを赦ふの性質」を持ち「女狭と称せられ」る小芳にふさわしい。だが、その「侠」の裏側に、恋愛・情事への積極性が貼り付いていたのを見逃してはならないだろう。

小よしはまではその烈性れつせいなるに依よて。情なさけの道には疎うとかりけるが。いかなる因縁いんえんにや。けふ侍に打うちかれし。若者の美色うつくしきなるに心動こころうごき。不図ふと恍惚こうくわうの念をおこし。累しきりに堪兼たへかね。一ツは夫故それゆへにこそ。相手の侍あいて さむらいを深く悪にくみ。その仕返しかへしをしたるなれば。今我家いまわがやに帰かへりても忘れやらず。ひとり胸むねを焦こがしける (同前)

若者のために勇を奮ふるつたのも、もとはその美色に惹かれたゆえだったというのである。芝居小屋で助けてもらった札にと昼間の若者(具足屋三七)が家を訪れたときの小芳はどうか。

兼かねて心ある身みは今更いまさら小よしも面はゆげに。頓やがて三七を奥の間へ無理むりに倡行いはんぎやう。盃さかずきをいだし飲酌いんしやくを催もよほしけるに。三七赤面せきめんして辞退じたいするを遮さげつ投め。その身もわざと数盃すはいを傾かたけ。酔よめに乗じて三七の膝元ひざもとにもたれて。はづかしげにいふ。わらは生うれつきて女ながらも。(中略) 御身おんみをおもふ余あまりの心根こころね。不便ふびんと思ひ給はれかしと。寄添よそひて打うちしほれたるが。…… (同前)

ここまでは女侠小芳がほの見せるいっそ可憐な娘ぶりと言えなくもない。しかし、当惑する三七に対して見せる積極性はどうだろう。次の

場面での小芳はむしろ情事・性への積極性を露わにした誘惑者である。

……三七は年弱くその上質朴なれば、何といらへすべきやうもしらず。当惑の体なるを。小よし兎角にいひこしらへて。放れがたなき風情なれば。三七けふの恩義に強くも言はなされず。終に転寝のまくらを並てわりなき中となり。……（同前）

そのことは、「小芳情を含んで三七を挑む」と題された挿画（図2）の、性行為を暗示することく、懷紙を口にくわえ、まさに帯を解こうとする小芳の姿にいつそう顕著である。

ここに露呈した好色性が、第四回に語られる犯罪行為に投影すると見てよい。

小芳・三七の間には一子三松まで誕生する。そんなある日、三七は主家の金を何者かに奪われ、小芳方に潜むうち病に臥す。振鴛亭『教訓いろは醉故伝』（寛政六年（一七九四）刊）でも類似の設定を見せていた。鎌倉の屋敷を駆け落ちてきた宋次郎・おしよは俱利伽羅龍紋九郎の家に匿われていたが、宋次郎は風邪がもとで寝付いてしまうと、おしよは薬代のために大磯の廓に身を売って宋次郎を見継ぐのである。似たような境遇でありながら、その窮状を救うために小芳が取ったのは、おしよの場合とはまったく異なる次のような行動だった。

（第四回 小芳の儼偶志一上人を却掠す／三七婦を辞て遺憾の情に沈む）

鎌倉に尊崇を集めていた志一上人を数妙という上臈が訪れ、執権畠山道誓の姫君のための祈禱を願った。接待を受けるうち上臈

した数妙は、奥勤めに男女の道を知らぬまま朽ち果てるのを不憫と思えと、上人に迫る。枕を交わしたあと、上人は女犯の罪を犯したと嘆き二百両で口止めした。これは三七の失った金を得るための小芳の計略であった。

僧侶を誘惑して女犯の罪を犯させ、それを種に二百両をゆすり取るという小芳の犯罪から窺われるのは何か。

小芳の計略を背後に忍ばせたまま、第四回は次のように始まった。
其頃鎌倉玉繩の一字に。下法成就の志一上人とて。道德賢硬の権者おはしける。

『道德賢硬の権者』とはあるものの、『太平記』卷三十六「清氏叛逆事」相模守子息元服事、細河相模守清氏が足利義詮・基氏らを失わんと志一上人に調伏させたという記事から取り出した人物であって、作者は「細川」を「星河」ともじつたうえでそのことを注記している。

志一上人はその后上洛し。星河相模守叛逆のとき。調伏の祈禱をたのまれし事太平記に見へたり（第四回）

こうした人物を取り込んだのは、女犯に陥る上人側の欠陥を用意しようとしたためかもしれない。また、夫のためと同情すべき犯行動機を小芳に与えてもいた。

その一方で、小芳は寝物語に、以前から喧嘩にかこつけて懐中の金を盗むことがしばしばあったと告白しもある。これについて、常習的な窃盗を小よしに犯させたのは『水滸伝』好漢の犯罪に比するためと考

えたとしても、〈女侠〉としての小芳の人物像を混濁させかねない。

それ以上に、「功」を揚げるべき「名勇」「勇婦烈女」に、性への渴望を露わにする演技としてであれ、好色性を付与しなければならなかったのは何故かという問題は無視しえない。

が、そこに踏み込むのは後のことにして、次の女侠を分析しよう。二百両の金を与え、主家の許しを得よと三七を送り出した小芳は、罪を犯した身を潜めるべく三松を連れて甲州台が原に向かった。そこで出会うのが、千束である。

四 千束

第三の女侠千束は、『太平記』卷三十五「京勢重南方発向事附仁木没落事」に材を取って設定された背景の中に登場する。佐々木道誉の讒言により、仁木右京太夫義長が足利に謀反を起こすことになるという状況である。

(第五回 西郷親子盟て義死を諍ふ／烈女候兵を具て仁木に荷担す)

佐々木道誉が仁木義長に謀反の兆しありと讒言、仁木追討の命が下った。仁木は防戦のため一族・麾下を催促する。西郷弾正左衛門尉斉範の娘千束は仁木の猶子左門之助と許婚の關係にあり、節義を守って仁木方に従う。仁木方劣勢となり、左門之助・千束夫婦は、中間弥弟を伴い、ゆかりを求めて東国をめざした。

幕府から出兵を求められた西郷弾正左衛門尉斉範は、仁木と交誼を結び、娘千束を仁木の子左門之助と婚約させていたためもあって、自分分は勝算のない仁木方につくが、嫡子太郎右衛門尉斉兼は義詮に忠義を尽くせと言ひ、斉兼は自分こそ仁木とともに死ぬと、父子で譲り合う。千束は、左門之助との婚約は私事であり、その義は自分が果たす故、父・兄は足利への忠義につくべきだと主張する。父の言葉に「汝は女ながらも烈性なれば」とあるように、千束は節義に殉ずる貞烈ぶりを見せるわけである。だが、この節婦・烈女の千束も性に関わる場面では貞婦性を疑わせるふるまいを見せるのではないか。

仁木方はやはり戦いに負け、千束は夫左門之助とともに知るべを頼って関東に下ろうとした。そしてその途次、左門之助は凶漢のために惨殺されることになる。

(第六回 垣谷の兇悪左門之助を撲屠る／千束姦淫に託して仇を報ず)

千束・左門之助が三州伏地の山中にさしかかるとき、近郷の邑長垣谷大膳が供のあぶれ者どもを引き連れ酒機嫌で通りかかる。千束の容色に惹かれ酌を求めた大膳との間に諍いを生じ、左門之助は谷底に投げ込まれる。千束は夫の仇を討つため、大膳に従うふりをして家に伴われた。妻となることを諾すかわりに左門之助の追善を求める。葬儀の夜、枕を交わしたのち千束は大膳を刺殺、手箱から二十両を盗んで弥弟とともに逃走した。

ここでは千束の復仇譚が語られるわけだが、千束が色仕掛けで隙をうかがうところにこだわってみたい。そうした策略は『女水滸伝』第一回の玉園がとった行動と類似するだろう。両者を対比させる所以である。

悪徳役人宿弥圖書の毘に落ちた柳下猛秀は牢内で自害する。妹玉園は復仇のため妾になると偽って圖書の屋敷に赴く。——夫婦となつて夫の仇を狙うという趣向は同一なのだが、玉園の場合は、床入りの前に固めの杯と偽って酒を勧め、泥酔させて討ち取る作戦であつて、貞操は守つたままなのである。『女水滸伝』が基にした「烈婦匕首」あるいは「石点頭」第十二巻「侯官県烈女殲仇」では、身を任せた後にその相手こそ夫の仇であることを知るのだが、ただし、仇討ちの成就の後、夫の墓前で命を絶つという形で過ちを清算する。それらに対して千束は、「枕を交わした後」に刃を振るうのである。「侯官県烈女」のような潔癖さを見せることもない。これだけから「姦淫」要素を強調するのは問題であるかも知れないが、すくなくとも、千束における貞操観の希薄さあるいは曖昧さを指摘しないわけにはいかないであろう。一九には、千束に夫の仇と枕を交わさせるのに少しの躊躇もないようなのである。

付言する。仇討ち後の千束に「二十両を盗んで逃げる」という余罪を犯させたのは、『水滸伝』第三十回「張都監血濺鴛鴦楼／武行者夜走蜈蚣嶺」で張都監の一家を惨殺した後で酒器などを懐にして逃走したところ武松を意識したためかもしれない。小芳の窃盜常習もそうなのだが、

節婦たちに「賊」の要素を付与する作者の意図を読み取るべきだろう。同じことが、次の挿話にも見て取れる。

(第七回 小芳蒙汁葉こよしひれくすり もろひを用りて旅客りょかくを瞞あざむく／千束の烈勢れつせい姦婦かんぷを帰伏きふくせしむ)

千束・弥弟は信州飯田に至る。千束に遅れた弥弟は、幼児をつれた女に用事を頼まれる。謝礼の酒を飲むと全身がしびれ、荷物を女に奪われる。女は子芳で、信州に逃れてきて、蒙汁葉作りを仲間に悪行を繰り返していたのだった。千束は被害はわずかと嘉し、さらに旅を続ける。

笠取山の尾崎を通るとき、弥弟は千し物の中に賊婦の着物を見出す。その家に千束が押し入ると、小芳は三松に授乳中。終わるのを待つて斬り合いとなるが、三松が小芳の裾にまつわりつく。哀れを感じた千束は、盗品さえ戻すなら罪は問わぬと言ひ、小芳も後悔する。そこに目代の手が回ったとの知らせ。小芳は石龍山の義興室のもとに落ちゆくことにする。千束も左門之助が義興方に所縁あったからと、行を共にする。

第七回の事件を契機に、小芳と千束はともに石龍山に加わる。だが、小芳の場合にはかつて真弓の方を救ったという縁のゆえだし、千束も新田にゆかりがあるとは語られないから、二人が石龍山に加わる必然性は明確でない。この後、二人が物語表面に現れることもなく、結局小芳・千束の果たす義挙は不明瞭である。

五 花妙

第八回に入ると、これまでの物語とは直接の関わりもなく、新たに
尼花妙の物語が始まる。

(第八回 荒川あらがはの義氣凶徒ぎききょうとの跋扈ばつこを拉はぐ／花妙くわめう好意かういを通じて邪淫じやいんに陥おちる)

荒川太郎が秩父大宮の酒店でならずものをこらしめると、優婆
夷花妙えわはが声をかけ、庵室あんしつに導く。酒肴しゅくやくを勧め、酔い伏した荒川を誘つ
てわりない仲となる。

花妙の造型には問題がある。小芳・千束に窺われた好色性、言わば(性的
過剰性)が露わなのである。

花妙は八尾の別当顯幸の臣香西兵部太夫の娘左枝である。洛陽合戦
で父が二階堂下総入道の家臣氷上平太郎則景に討たれ、重代の名剣「女
狐丸」を奪われたのを恨み、丹波に赴いて氷上を討とうと図る。氷上
の妾となつて機を窺ったが、いつしか氷上に情がわく。それを打ち払
うように、父の一周忌を期して仇討ちを敢行しようとする、氷上は
香西のための祭壇を営んでいた。氷上の旧友であつた香西の頼みを受
けて討ち果たしたのであり、「女狐丸」もその折に譲られたことを聞き、
左枝は悔いて死を覚悟する。氷上は「女狐丸」を与え、尼になつて父の
菩提を弔えと言う。左枝は優婆夷となつて秩父大宮に下つた。

こうした経緯からすれば、左枝＝花妙は、もともと父の仇を討つ孝

子として登場したと見てよい。「左枝女ながらも。性勇敢なりしゆへ」と、
その人となり設定されてもいた。復仇の手段として仇敵の妾になる
のは、それとしてやむを得ない選択であつただろうし、暮らしを共に
するうち男に情が移るのも、人情の自然と解すべきかもしれない。父
の敵というのが誤解に基づくことされ、相手が義を守つた人であつたこ
ともされるから、左枝が仇の妾となつたことも、その仇に情を移したこ
とも、反貞女的との非難を受けないような仕組みになつてはいるわけ
である。

しかし、一九は、氷上に情が移つて決行の時期を遅延させてしまつ
たのを、生来の男好きゆえだつたと語つてしまふ。

もと淫蕩いんとうの左枝さえだ。はじめのほどは緞令身たんれいみは穢けがすとも心までは穢けが
さじと思ひたりしもいつしか。則景のりかげの情なさけに羈はだされ。うか／＼と月日つきひ
を過しける……(第八回)

左枝自身に「女の鄙情ひじやうのあさましや。御身みの情なさけに心迷こころまよひ」と告白させて
もいる。

氷上を仇と狙うことの不当を悟ると、己の誤解を悔い、則景にも諭
され、「髻もみぢをはらひ。優婆夷うわはいとなり。花妙くわめうと名なを改あらため」て関東に下つた
はずなのに、左枝＝花妙に淫蕩さを慎むような態度は見えない。

本分の淫蕩いんとう止とまず。其上そのうへ性勇備せいゆうびなれば。豪傑がうけつの徒またはに交ことる事ことを好み。
大宮おみやの街まちに淫者あがれものどもの魁首かしら石塔せきとう丹次平たんじへいといふ侠士けつしに。いつしか馴なれ
染そめて。この妾せうとなり。扶助ふたよを受くらしけるに。……(同前)

たしかに花妙の「侠」を強調してはいる。しかし、丹次平の妾となつた



図3 巻4（花妙と荒川太郎）



図4 巻5「丈夫志を反して大望に与す」



図5 歌川国貞『今様三体志』

のは淫蕩さゆえだった。その状態に飽きたらず、他の男を誘いもする荒川太郎の配下と名乗って酒店の勘定を踏み倒そうとする男たちを徴らしめる太郎の姿に惹かれたのだろう、声をかけ、自分の庵室に誘う「盛年三十ばかりの」せいねんみそじ「伎倆優美なる」きりょうゆうび「優婆夷こそ花妙である。その積極性は、荒川太郎が酔い臥した後に露わになる。

花妙^{はな}勞^{ろう}り枕^{まくら}をあてがひ。酒狂^{しゅきやう}に乘^{のり}じて。其身^{そのみ}も傍^{かたはら}に打臥^{うちふし}けるが。
もとよりせいしんはん
元来^{もとより}性質^{せいしん}淫奔^{いんぽん}なるゆへ。かゝる染衣^{せんゑ}の身^みを忘れ。たはふれかゝりて。
さまぐ言^{いひ}すゝめて。仮^{かり}の契^{ちぎ}りに打解^{うちとけ}合^あわりなき中^{うち}とぞなりにけ
る。(同前)

第八回の挿絵を見よう（図3）。右に引用した場面の翌朝であろう、先に起きて観経する花妙と、夜着から身を起こす荒川太郎。盆のわきに散らばっているのは、使用済みの丸めて捨てられた紙ではないのか。あるいは、第十回の「丈夫志を反して大望に与す」と題された挿絵はどうか（図4）。「大望」の主体である荒川太郎は襟元をくつろげて布団の上に座り、しどけなく寄り添う花妙は口に懷紙をくわえている。まさに情交に及ぼうとするその場に、丹次平が踏み込んだところである。荒川太郎が左手で頭をかいているのは照れ隠しでもあろうか。

ここに描き込まれた懷紙、丸めた紙は、浮世絵春画に頻出する小道具である。図5は猿猴坊月成稿・百垣千研作・不器用亦平（歌川国貞）画『今様三体志』（文政十二年（一八二九）刊）上巻「吉原の草」に載る男女同衾図である。男の首に回した女の左手は懷紙を握っており、布団の上には丸められた紙が散らばっている。図3・4は直接的な描写こそそ

避けているが、春画的場面を想像させるものと言わなければならない。

(第九回 凶徒等宿意を石塔に託す／丹次平猛勢石龍山を辱む)

秩父大宮に侠武あり、背中に石塔の刺青を入れたところから石塔丹次平と名乗り、兇盗の頭となっていた。丹次平は、子分らが荒川に痛めつけられたと聞き、仕返しを機会を窺っていた。花妙の庵室を訪ね、他行した花妙の帰りを待つところに、荒川からの手紙が届く。読み、荒川と花妙の情通を知る。怒った丹次平は使者の髪を剃り落とし、石龍山の麓に縛り付けてさらし者にした。

第九回は花妙をめぐる二人の男の対立——花妙の〈性的過剰性〉によって引き起こされた三角関係を語る。では、それはどのように決着するのか。

(第十回 奸夫闘諍を犯て大業を発覚す／丹次平志を反て旧識の恩を謝す)

荒川が花妙の庵を訪ねるとき、丹次平が躍り込む。荒川が密通の首代として刀を差し出すと、それは婚約の印として香西家から篠塚家に贈った「男狐丸」であり、荒川こそ篠塚八郎であった。奇遇を喜ぶ二人を、丹次平は自分を欺く芝居だと怒り、再び斬り合いとなる。丹次平の石塔の彫物から丹次平は荒川の武芸の師磯貝民弥の子市郎匡徳と判明する。丹次平・花妙はともに新田家再興を図るべく石龍山に加わった。

花妙が篠塚の次男八郎時運と婚約していたことは花妙の出自を語るくだりに書かれていた。第一回、伊賀の局登場の段では、弟八郎が北国で行き方しれずになっていたともあった。男狐丸・女狐丸の名刀もそれを支える小道具として用意されたのである。そうした伏線を集めたのが、荒川太郎実は篠塚八郎という事実を明らかにするこの場面であった。丹次平の父は八郎の武芸の師であったというもう一つの因縁が重ね合わされてもいる。

ところで、こうした奇縁物語をささえるのは、邂逅を願ってやまぬ、ある種の一途さではあるまいか。しかしながら、一九はそうした性情を花妙に与えようとはしなかった。逆に「淫蕩Ⅱ性的過剰性」をその「本分」としさえするのである。三人とも新田再興の目的に参ずることで、三角関係はあたかも解消したかに扱われる。三角関係を引き起こした花妙の「男好き」も同時に問題から離れていってしまうかのである。しかし、花妙に（ひいては他の女侠たちにも）なぜこうした性的過剰性はを付与したのかは謎として残り続ける。

その点の解明が本作を把握する上で最も重要であると考ええる

六 正編を模倣・反復する第二編

『名勇発功談』の構成は次のようにまとめうる。

① 伊賀の局、真弓の方母子とともに秩父石龍山に入る。

② 閻魔の小芳、夫のために罪を犯し、信濃に逃亡。

③ 千束、夫の仇を討ち、信州をよぎるとき、小芳と知り合い、ともに石龍山に入る。

④ 花妙、東国に下り石塔丹次平の妾となっていたが、荒川太郎と通じ、三角関係を処理した後、ともに石龍山に加わる。

⑤ 花妙を慕う泣き尼妙珍が入山を許される

新田義興室真弓の方と遺児を擁して伊賀の局は秩父石龍山に新田再興の義兵を集める。様々な事件を契機として女侠らが加わり、反足利の威勢を奮った。——このように『名勇発功談』を要約してみると、完結感の弱さを指摘せざるを得ない。女侠を入山させたところで物語展開が途絶しているからである。伊賀の局らの目的は新田氏再興にあつたはずであり、繰り返し引くが、第二回で次のように語ってもいた。出生の姫君を男子と詐り。仮に小太郎吉益君と称して事変を伺ひ。再び義兵を起さんと。企けるこそ逞しきそれなのに、その点に言及されることがない。

また、未完の感を強く与えるのは、前編末尾に泣き尼妙珍の説話がおかれているためである。

(第十一回 妙珍慌^{めづかし}誣^{いつはり}て凶賊を憫^{あはれ}哀^{かな}せしむ／丹次平が喋^{うげん}言^{げん}却^{かへ}て害^{がい}羞^{しゆう}を懷^{いだ}く)

荒川太郎は伊賀局とともに石龍山にこもり劫掠の業を続けていた。花妙を尋ねて弟子妙椿が訪れる。伊賀局は、泣き尼という能を見込んで山に止める。妙椿を試した丹次平は、妙椿の語る偽り

の身の上話にもらい泣きしてしまふのだった。

この妙珍は、『太平記』には登場しないものの、そこから派生した物語によく出てくる「泣き男」杉本左兵衛⁽¹⁾(本作では、「間杉」に改められている)に発想の手がかりを得た人物である。伊賀の局は次のように言つて妙珍を山塞にとどめる。

わらは舅君正成公は間杉左兵衛^{しんしきまさなり}といひし。泣男^{なみおとこ}を抱給^{かへ}ひて。敵^{てき}を誑^{いつは}り。勝利^{しやうり}を得給^えひしと聞及^{き、およ}り。(第十一回)

モデルである杉本左兵衛は、その嘘泣きの迫真性によつて正成が戦死したと足利方に信じさせ、正成の奇襲を成功に導いた。妙珍も対足利の戦闘の中で有効な働きをさせるべく予定していたのではないのか。にもかかわらず、入山前のエピソードも与えられず、山中にあつてはその能力を疑う剛胆の丹次平をすら涙にむせばせるといふ、浮遊した挿話に登場するに留まる。物語全体を締めくくる意味合いを何ら持たないにもかかわらず、妙珍の説話が本編の末尾に位置するのでは、到底、物語が完結したと感ぜさせえない。妙珍の活躍する後編が期待されるところである。すなわち、一九には後編の計画があつたはずである。

前に述べたように、本作には第二編が存する。刊行されることはなかったようだが、次のように全五冊中四冊の版下本が残されている。

第一、五巻……名古屋市逢左文庫蔵⁽²⁾

第三、四巻……西尾市立図書館岩瀬文庫蔵

(第二巻は逸失)

ただし、「発功談第二編」は下野二荒山にもう一つの女盗賊集団が結集するまでを語るのみであり、これによっても団円には至らない。第二編巻五の末尾に、第三編三巻の予定が揚げられる。

此后両山の人々一手になりて。秩父が嶽の山陣にたてこもり。時変を伺つて義兵をあげ新田小太郎義益君を大将として鎌倉へ打出。管領左馬頭基氏公をひきうけ。忠戦に英名をとろかし。北朝に敵するより終に新田家再興の忠義を果すまで。前後三巻にくわしく綴り。女水滸伝追加として引続き出版仕候間発市の刻御求め御一覽可被下候様偏に奉希候以上

石龍山・二荒山に結集した二つの盗賊集団が合流を果たし、対足利戦を経て新田家再興で終わるといのが、冒頭に予告した物語の枠組みを完成させる、『名勇発功談』全三編の構想なのである。

しかし、それが十遍舎一九による構想だったのかは疑問である。正編と第二編との間の必然的連続性を認めることはできない。結論を言ってしまうと、第二編は一九の腹稿に基づくのではなく、門人九遍舎主人が正編の記述から継続可能性を見出して、新たに構想を立てた作品と推測される。

まずは二編の構想を確認する必要がある。『発功談』の場合と同じように、第二編の内容をまとめてみる。

- (1) 二荒山の巻風は姉月妙を探すべく下山する。(第一回)
- (2) 二荒山に残った虎の尾は、雲龍村を襲い、争いを経て雲龍の阿進・月妙尼と意気投合する。(第一～二回)

- (3) 巻風は元固と夫婦になり、夫を二荒山に送るが、鎌倉で畠山道誓に捉えられる。(第四～六回)

- (4) 化粧坂の遊女深山木は平太と逃亡する。(第七～八回)

- (5) 解き放された巻風は二荒山に向かう途中で深山木と邂逅、ともに二荒山に入る。(第九～十一回)

(2)と(3)の間に逸失巻二(第三回)の内容が挟まれるはずだが、それを抜きにしても、正編が個別の女侠列伝を語ってそれぞれが石龍山に加わると構想したのに対し、第二編は二荒山を中心として同じような列伝構想を立てただけは確実に言えよう。こうして、並立する二つの拠点を、「両山の人々一手になりて。秩父が嶽の山陣にたてこもり」と、一つに合流させるのが第三編の機能だったわけである。

しかし、正編で梁山泊になぞらえられた秩父の「石龍山」を、物語においてもっとも重要な拠点であるにもかかわらず、第二編では何故か「石龍山」と誤る。何よりも、人物の共通性がない。伊賀の局ら新田氏の代表は共通に語られる(実際に登場することはない)のだが、第二編には正編と異なる新たな女侠たちが登場し、しかも正編の女たちと何らの関係もとらず結ばないのである。丹次平の弟平太正満が登場させられ、彼を媒介にして女同士の結を設定したと言えないではないのだが、正編には何の伏線も敷かれていないから、関連づけのために案出した新設定と見るほかない。

第二編冒頭部は正編の要約になっている。

(前略) 此に新田家の侍臣篠塚八郎が姉伊賀の局等は。主君義興公

の奥方。真弓の方母子をもちたて。新田家再興の大業を発してより。意は清浄にすみぬれども。かりに強賊の業を学び。東武秩父が嶽石籠山なる山陣にたてこもり。一味の助工を集めけるに。不意丹次平花妙等を得しより。次第に同賊の数をまし。いよ、勇氣のまさりける。心のほどこそたくましけれ。(第一回)

これは九返舎主人の正編理解・評価を示すものであろう。こうした理解に基づいて物語を書き継ぐはずなのだが、続編作者は時間的に正編の後を続けようとはしない。むしろ正編末尾から時間を引き戻し、〈列伝・結集〉を柱とするもう一つの物語を、正編と並行する時間軸の上に展開させるのである。物語は新たな展開を見せるのではなく、正編を言わば反復・模倣している。『水滸伝』でも九紋龍史進らの少華山集団や、花和尚魯智深らの二龍山集団が梁山泊に合流するということはあつたから、それにならって、相互に独立した二系列の盜賊集団物語をあえて並列的に構成しておき、石籠山に合流させようと構想したと考えることもできようか。そうだとすると、正編と二編とは異質性が目立つのである。

まず、『水滸伝』の利用において本編と後編とは別の様相を見せる。そもそも、正編においては、直接『水滸伝』から趣向を引き用いたところが見いだしがたい。前述の夫の復仇を果たした千束が二十両を盗んで逃亡する場面が、鴛鴦楼で敵を殲滅した武松が金銀の食器をつぶして拐帶するところを思わせる程度なのである。一九は積極的に『水滸伝』の趣向を利用しようとはしなかった。第二編はそれとは異なる。

巻風が山を下りたあと、虎の尾は麓の村を襲うのだが、そこには阿進があり、賊を撃退する。

此女いかなる由縁にや右の腕に黒き痣ありて。そが形ち雲龍によく似たり。とて人仇名して雲龍の阿進とよび。且この村の名をさへも雲龍村とぞいひたりける。(第二回)

上半身に入れた九紋龍の刺青が仇名になった史進の設定をまねたものであるのは述べるまでもない。「行年廿一」の阿進の仇名にちなんで村の名が付けられたという不自然さ——村名が二十年ほどの歴史しか持たないことになる——は、「史家村」が史進家の姓を村名とするのをもじったために生じた。「雲龍の阿進」は音読みとしても「九紋龍の史進」に合わせたものであろうか(「きゅうもんりょう」と読めば合致しないが)。いずれにせよこれが『水滸伝』に拠るのは言うまでもない。そこに魯智の月妙が滞在しており、協力して賊を追ひ払ったとするのは、史家村から逃れた史進が花和尚魯智深と知り合うという展開を縮約した形になっている。

こうした趣向利用の直接性が異質なだけではない。第二編は、『水滸伝』の冒頭に近い話から改めて素材選びを始めたことになるだろう。正編が採用しなかった『水滸伝』利用という方法を第二編が示しているわけで、一・二両編が別人によって構想されたものであることを伺わせるのである。

このように、第二編の構想について確認した上で、巻風等の造形について見ていこう。正編の女侠たちと対比するためである。

七 「悪」の代替としての〈性的過剰性〉

正編の小芳・千束・花妙と比較するとき、二編の女たちには、次のような異質性が認められる。

① 阿進・月妙・虎の尾など女と設定されはしながら、女であることに関わる物語を担わない者がいる。

② 中心的に活躍する巻風は、欠巻においてどのような形かは解らぬが元固と結ばれ、そのあと夫を二荒山に送ると、単独で行動する。道誓に妾にと望まれてもかたく拒否し、貞節を守る。

③ 深山木は掠われて遊女に売られた女だが、平太に対して純情を持ち続ける。売女ではあっても、好色性を感じさせる設定であるとは思えない。

これに比べると、正編の女の特異性が見えてくるだろう。

小芳は、性に積極的であり、夫のためとは言え、肉体を餌にした犯罪を企てる。夫の仇を討つための千束の行動には、貞操に配慮したあとが見えない。花妙は、挿話全体としては許婚者と再会し結ばれるといった枠を担うのだが、尼になってなお丹次平の情人になり、しかも荒川太郎を誘うなど、性的な放恣さをも併せ持っている。たとえば『南総里見八犬伝』において、善女の代表として「八犬女」を挙げうるだろうが、それに対して悪の代表と見るべきは玉梓であり亀篠であり船虫である。これらは神余光弘の妾でありながら山下定金と密通し権力を

壟断する女、若いときから男遊びにうつつを抜かし父の留守に暮六を引きずり込む女、犯罪と逐電を繰り返しながら並四郎の女房、山猫の怪の妻、山賊酒顛二の情婦と次々に男を取り替える女。あるいは泡雪奈四郎と密通し夫を謀殺する夏引などもその一類に含むことができようか。善なる女と悪なる女は性的な要素の有無によるとすら言いうるのである。野合と非難されかねない大塚番作・手束の婚姻は、親たちの定めた許婚者という設定により、周到に非難を回避している。

すなわち、曲亭馬琴であれば悪婦・毒婦に付与するような〈性的過剰性〉を、一九は新田再興の「功」を上げるべき女侠たちに付与していることになる。『水滸伝』の〈「悪」の主題〉——犯罪者でありながら正義でもある盗賊たちをどのように設定するかという問題。本作の南朝義軍も秩父が獄もつて盗賊稼業を働いていた。ただし、その対象が「私曲なる」「守護頭人」や「野伏落」に限定され、領民には及んでいなかったと述べられてはいた。新たに入山する小芳・千束・花妙も、新田義軍への参加によつてその「義」は充填されるのである。しかし入山後の集団としての盗賊行為を語ろうとしない本作において、一九は入山前の女達に悪なる行為を実行させなければならなかった。小芳の場合のみ、窃盗・美人局・置き引き等の犯罪を重ねるが、他の女たちは賊らしい行動を見せない。そのときに「賊」要素の代替となったのが女性 の道徳において悪と位置づけられる、〈性的過剰性〉だったのではないか。こうした意味で、『名勇発功談』本編は、『水滸伝』の〈「悪」の主題〉を学ぼうとしたのである。¹⁾

(1) 中山尚夫「十返舎一九年譜稿」(『十返舎一九研究』、平14・

2、おうふう、所収) 参照。

(2) 『名勇発功談』本文の引用は国立国会図書館蔵本による。以下、同。ただし、序文のみ句読点を私に付した。

(3) 『名勇発功談』第二編本文の引用は、第一、五巻は名古屋市逢左文庫蔵本、第三、四巻は西尾市立図書館岩瀬文庫蔵本による。以下、同。

(4) 『太平記』本文の引用は(日本古典文学大系)36『太平記』三(昭和37・10、岩波書店)による。以下、同。

(5) 黒沢真道編『南朝太平記』(『国史叢書』、大3・3、国史研究會)

(6) 大蘇芳年「月百姿」は東北大学附属図書館狩野文庫蔵。

(7) 横山邦治『読本の研究』(昭和49・4、風間書房)第三章「終結期の読本」第一節「稗史ものの諸相」参照。

(8) 濱田啓介「近世小説の水滸伝受容私見——『坂東忠義伝』と『絵本更科草紙』」(『近世小説・営為と様式に関する私見』、平5・12、京都大学学術出版会、所収)

(9) 拙稿「『女水滸伝』論——「江戸の水滸伝」のうち——」(『国際文化研究科論集』第14号、平18・12 参照)。

(10) 林美一『歌川國貞』(『江戸枕絵師集成』、平1・9、河出書

房新社)より転載。書名は見開き題に従った。

(11) 加美宏「楠木正成と泣男——『太平記』評判の影響——」(『太平記の受容と変容』、平9・2、翰林書房、所収) 参照。

(12) 尾崎久弥『珍書愚書』(昭和43・1、有光書房)に入手経緯についての記述がある。

(13) 〈性〉を主題の一つとする人情本ジャンルにも考慮する必要があるが、本校では触れることができなかった。

【参考】『名勇発功談 第二編』一名女水滸伝』梗概

第一回

二荒山開闢之来由
阿進夜中に賊徒と戦ふ

下野国二荒山に花垣の虎の尾と蟠螂の巻風が盗賊の業をなしていた。巻風は姉月妙つきたえの行方を捜すため一旦山を下りることになり、相模に向かった。

残った虎の尾は手下を率いて強奪を続ける。悪口五太郎が郷士の家に押し入ると、阿進が長刀で応戦し追い散らす。なおも追跡しようとする阿進を、立ち戻った大柄の比丘尼が制止した。

第二回

阿進勇を感じて虎の尾を生捕
月妙強気を顕して賊徒を討つ

阿進は右腕の雲龍に似た黒痣から「雲龍の阿進」と仇名される女伊達だった。もとは侍であつた父とともにこの村に移り住み、父の死後もその弟子たちに剣術を教えて豊かに暮らしていた。また、大比丘尼は魯智の月妙げつみょうといい、このほど阿進の家に同宿した者であつた。阿進・月妙尼は賊が仕返しに来るのを待ち受ける。

五太郎郎の話に怒った虎の尾は、藪影蚊文二に山陣を守らせ、能幕佐万太・阿武羅雲溪・南膜漢天蔵らを引き連れ雲龍村を襲つた。阿進は虎の尾を見方にしようと思いつき、生け捕りにして柱につないだ。賊徒は逃げ失せる。

第三回（欠巻——前後の記述から推測）

「……阿進・月妙尼は虎の尾とともに二荒山に入る。……月妙は鎌倉に赴き、刀剣を買おうとして管領の家臣に横取りされる。報復のため僧体となつて探すが、見つけられず、鎌倉を離れた。……巻風は武州山之瀬村で後藤肥後守貞重家に一宿する。」

第四回

元固巻風意を明して赤縄を結ぶ
貞重忠情の両に命を軽じて義を全す

武州山之関村の郷士後藤筑後守貞重の子情次郎元固は、父と謀り、巻風の正体を探ろうとするうち、女の美しさに心迷い、契りを結んでしまう。

貞重は観応の頃足利に味方したが、のち武門を失いこの村に移り住んだ。長子藏人元吉は母方の伯父船田入道とともに新田義興に従つていたが、矢口の渡しの戦いに負傷して家にたどり着くと、旗印を新田の余類に渡し、義興室の腹の子をもつて新田を再興させよと言つて息絶えた。——情次郎は身の上を話し、巻風は秩父石籠山に籠もる新田の余類に縁ある者だろうと迫る。巻風は、河内生まれでありいとこが楠正成に縁があつたので姉および一女婢とともに関東に下つたものの、伊賀の局とは巡り会えないまま、二荒山に山賊の業を続けていたことを明かす。と、新田の旗印と刀に貫いた兜とを持ち、足利の臣が新田義興の家臣を討ち取つた、と言つて貞重が現れる。巻風は貞重が陰腹を切つたと見抜く。貞重は、ひとたび足利に臣従した義理は果たした、

情次郎・巻風は石籠山に赴き新田再興に尽力せよと言いつ残して果てる。

第五回

元固計約して巻風にわかる
巻風旅宿に凶徒を視る

貞重の弔いを済ませ、情次郎を二荒山に送ると、巻風は月妙を捜すために鎌倉に赴いた。由木の下宿根倉屋宿六方を訪ねると、月妙は春頃に滞在していたが、花水橋際の道具屋で買おうとした刀を管領の身内人に横取りされて斬り合いになり、悔しさのため頭を剃り顔に漆して探したものの、見つけないまま鎌倉を出たとのこと。話のうち、隣座敷から巻風の様子を窺う客があった。畠山道誓の子玄蕃と大磯の男伊達闇魔の長蔵・樽酒吞太・堂下紋兵衛らである。巻風は、玄蕃こそ姉月妙に仇した侍と推し、仕返ししようと決意する。

第六回

巻風酒氣に乗じて凶徒等を打
玄馬補助を得て巻風を生捕

畠山玄蕃郡時は、長谷部信国の刀を横取りしており、怒って供の者二人を斬り殺した女によく似ている故、その妹であろうと推し、妹を代わりに討って腹を癒やそうと供の男伊達らと企てた。巻風が根倉屋を出、先ほどの男を捜して回るところに、玄蕃らが現れ、刀争いの件を聞かせて挑発、争いになった。畠山道誓の行列が通りかかり、加勢の侍が加わったため、巻風は捕らえられ、畠山の屋敷に引き立てられた。

道誓の尋問に対し巻風は、河内国智早村の百姓の娘であり、父を殺

した鎌蔵を追って鎌倉に下ったのだが、玄蕃に無体を仕掛けられたと訴える。その美貌に春情をかき立てられた道誓は、妾にしようと思いい、屋敷にとどまり仇を捜すように勧めたが、飽くまで解き放せと求めるので、巻風を責め苛んだ。

第七回

山賊怪異の評を得る発語
深山木傾国に実情をつくす

箱根山中に山足の熊王という異相の山賊が出没していた。

大磯宿化粧坂の廓轡屋孫四郎方の遊女深山木に畠山玄蕃が通っていた。深山木は浪人客と二世を契っており、玄蕃に靡くことはなかった。浪人客は北畠の旧臣磯貝民弥の子平太匡満である。幼時寺小姓となつたが身持ち悪く、寺を飛び出すと悪事を重ね、大金を手にして深山木に通い始めたのだ。この夜深山木の客となった平太は身の上を明かし、石籠山に籠もっている兄市郎匡徳と石塔丹次平のもとに駆けつける、深山木の身の代は済ましておくので自由の身となれと言う。深山木はどこまでも伴えと望み、二人同行することになる。話のうちに深山木の髪から落ちた簀は、前夜小田原宿で争った熊王が平太に打ち付けた簀とよく似ている。深山木は山之関村の郷士後藤貞重の娘であり、待乳山で拐かされ、廓に売られるときに貰った簀なのだった。

第八回

平太浮世町に凶士を討うつ

深山木夜中に化粧坂を走る

平太は深山木の身請金を払い、郭を出る。玄蕃は大磯の色町の茶屋でそれを聞き、長蔵・吞太・紋兵衛らとともに平太を襲うが、返り討ちにあう。平太は、一旦平塚の旅宿黒木屋白平方に逃れたあと、化粧坂に立ち返ると、廓を抜け出してきた深山木と出会う。

第九回

平太再熊王に出会して直に仇を報ず

山足立蔵死して義心の胸中を明す

二人の行く手に山足の熊王が現れ、深山木を連れ去ろうとする。平太と争い斬られた熊王は、異相になった因果を語る。——熊王は、後藤蔵人元吉に仕えた山足立蔵であった。矢口の渡の戦いで行方知れずとなった蔵人を探して諸国を巡った後、箱根山中に至り、熊の生皮をかぶって諸人を脅し賊を働いていたところ、皮が張り付いてしまったので、熊王と名乗り、山賊を続けつつ新田の余類を探し求めていた。かつて拐かして廓に売った娘が主の妹深谷であったことを知らされて悔いる熊王に、蔵人はすでに死んだと教え、切腹を勧める。二人は山之瀬村の貞重を訪うべく武州をめざした。

第十回

巻風宿意を管領に托して道哲を瞞く

深山木旧家に延停して歎涙を残す

根倉屋宿六は巻風が道誓に虐げられていると基氏に訴えた。基氏は

道誓の弁解を信ぜず、巻風の釈放を命じた。この道誓は後に謀反を企て滅びることになるのである。巻風は根蔵屋に謝意を表し、下野をめざした。途中貞重の墓に詣でようと山之関村に立ち寄るとき、平太・深山木と出会い、それぞれのいきさつを語り合う。

第十一回

二荒山勇婦誓て軍議を回す

秩父嶽一族將に義兵を起とす

平太・深山木は巻風とともに貞重の墓に詣でたあと、下野二荒山に入った。虎の尾・月妙・阿進が迎え、先着の兄情次郎元固とも再会した。鎌倉に討つて出、南朝の官軍に力を合わせんと議するが、元固・平太の勧めに従い、秩父が岳に立て籠もった新田の余類に加わることとなった。

石籠山の山陣では、新田義興の遺児小太郎義益を大将に、魁首伊賀の局、小芳・千束・花妙の三勇婦および篠塚八郎・磯貝市郎が強盗・野武士を従え、北国の御連枝と謀じ合わせ、義兵を起こさんとしていた。二荒山に盗賊が威を奮うことを聞き、降参させるべく兵を発しようとした。

二荒山一党は新田の旗印を押し立て、秩父に向けて出立した。